

## 鈴木原子力委員会委員長代理の海外出張報告

平成25年5月31日

## 1. 目的

2013年5月12日～14日に米国カリフォルニア大学バークレー校バークレー国立研究所で開催される「STS Forum on Fukushima」と題する国際ワークショップに参加し、福島事故後の日本の原子力政策について基調講演を行う。

## 2. 日程

5月11日（日）	成田発 → サンフランシスコ着
12日（月）	国際ワークショップ 「STS Forum on Fukushima」 参加 基調講演「Nuclear Energy Policy in the Post-Fukushima Era: A Need for a Paradigm Shift」
13日（火）	サンフランシスコ発 →
14日（水）	成田着

## 3. 報告（概要）

- このプロジェクトは、Science & Technology Studies (STS) の年次大会で福島事故を扱った発表が多かったことから、STS 国際学会が中心となり、科学史、政策科学等の分野にまたがる福島事故に象徴される「災害 (disaster)」に焦点を当てたプロジェクトとして立ち上げられた。今回、全米科学財団 (NSF) から財源を得て、その第1回会合が開催された。
- 今回は、日本から東京電機大の寿楽浩太助教をはじめ数名が参加。IAEA から Dr. R. Chhem, UC Berkeley の Ahn 教授等も参加し、約30名の討論型ワークショップとなった。
- ワークショップは、事前に配布された論文に対し、参加者が自由にコメント、議論を行う形式で行われ、いわゆる論文発表のためのプレゼンは実施されない形式であった。
- 12日（月）は2つのプレナリー・セッションがあり、最初はSTS学会として「災害科学 (disaster science)」を扱うことの意義について議論があった。特に、STS としては、従来の「上流型 STS」（理論的分析）から「下流型 STS」（政策や社会への提言）に向けて、具体的に社会に貢献する STS の在り方などが議論された。
- 「災害科学」はこれまで主流とは見られておらず、科学としてもデータの不足や汎用化の困難さ等があるとされてきた。しかし、災害を包括的に分析することで、将来の社会損害を少なくすることができる有用性についての認識は高まっており、災害科学の重要性を見直すことの重要性が強調された。
- 2つ目のプレナリー・セッションでは、東大の松本三和夫教授が講演を行う予定であっ

たが、急きょキャンセルされたため、松本教授が提唱する「構造災」（福島事故も、個別技術問題、特定の組織や意思決定によって起きたものではなく、科学技術と社会の関係に基づく構造的な災害である）という概念について議論が行われた。特に、この事故は日本特有、あるいは原子力村特有というものではなく、科学技術と社会の関係でどこでも起こり得るものである、との認識も重要である点が確認された。

- その後セッション 1 では、事故（災害）そのものについて 5 つの論文について議論が行われた。福島事故調査報告書のうち、特に国会事故調に焦点を当てた分析、阪神大震災との比較、カトリナとの比較等の分析も行われた。一方で、チェルノブイリ事故や TMI 事故、BP の原油汚濁事故等との比較分析も行われた。その中で、「日本独自の文化、社会政治構造」について、国会事故調の議論も踏まえ、多くの意見が出された。
- セッション 2 では、災害に対する制度・組織的対応についての論文が 5 つ紹介された。災害後の避難の在り方、情報共有の手段としてのインターネット、TMI やチェルノブイリ事故との比較、避難のためのマップなどについて、活発な議論が行われた。
- その後、今後の研究テーマとして有望な概念やテーマについて議論が行われた。焦点は「原子力として特別な点は何か」で、他の災害と異なる点について議論が行われた。放射線リスク、原子力村、核兵器との関連等が特徴として挙げられた。
- このワークショップのユニークな点は、すべての参加者がワークショップのウェブサイト可以随时書き込みができるようになっていて、議論をしながらも、各自がコメントを書き込んで、ウェブサイト上でも議論ができるようにした点である。また、インターネットを使って、現地に来られない参加者がビデオ参加する方法もとられた。
- 夕食前に「Nuclear Energy Policy in the Post Fukushima Era: A Need for a Paradigm Shift」と題して基調講演を行った。質疑応答では、原子力の持つリスクへの認識はどう変わったか、国民の信頼回復は可能か、東電や他の電力会社は今後どうなるのか、アジアの原子力開発は福島事故以降も続きそうか、といった質問が出された。
- 福島事故をめぐり、社会学、人類学、建築学、科学史、倫理学といった分野の専門家が、STS 学会というコミュニティの中で、この事故の持つ意義や他の深刻な災害との比較分析を行う事により、今後の原子力と社会との関係を考える上で、有益な議論が行われた。
- また、限られた時間内で実りある議論を行うという観点から、インターネットを最大限に活用したワークショップの形式も、大変参考になった。

参考 ウェブサイト：<http://fukushimaforum.wordpress.com/workshops/>